

第四篇

竜りゅう

宮ぐう

占せん

領りょう

戦せん

靈主体従子の巻  
〔靈界物語 第一卷〕

## 第二章 武蔵彦一派の悪計 (二五)

武蔵彦、春子姫、足長彦の悪神は、最初の黄金橋破壊に失敗したので、こんどは大挙して一挙に之を打ち落さむとし、数万の雷神や、悪竜、悪狐および醜女、探女の群魔を堂山の峽に集め密議を凝らした。その時に参加した悪神は竹熊、木常姫を大将とし、八十熊、鬼熊、猿飛彦、魔子彦、藤足彦、中裂彦、土彦、胸長彦、牛人らの悪神が部将の位地につき、黄金橋の占領破壊に全力をつくした。

そして木常姫、魔子彦は東の空より、猿飛彦は東南より、牛人、藤足彦は西北より現われ三角形の陣をとり、数万の魔神を引率して、疾風迅雷的に竜宮城を占領すべき計画をめぐらし手筈を定めた。

この目的を達するには、地の高天原を内部より混乱瓦解させねばならぬとし、魔軍はたくみに探女を放ち、そして瑞の霊の肉体を陥れむとして炎の剣や、氷柱の槍にて大々的攻撃を開始した。

※瑞の霊は茲に霊を下して大八洲彦命と現われ、寄せくる探女を真澄の剣を振かざし山の尾ごとに追い伏せ、河の瀬ごとに切りまくった。その神勇に驚き周章ふためき四方に逃げ散った。竹熊、木常姫らの計画は全く水泡に帰し、数多の部下を失い、失望の結果、ふたた

※龍宮占領戦……地上におけるさいこうの聖場とされる場所を邪神たちがわが物にしようとする争奪戦のこと。

※堂山の峽……綾部の郊外にある上谷の山あい。

※竹熊……悪神の系統たる中村竹造氏のこと。

※木常姫……中村竹造氏と同腹の開祖の三女福島久子さんのこと。

※八十熊……京都から出て来た谷口熊吉氏のこと。

※鬼熊……開祖の長女米さんの夫たる大槻鹿造のこと。

※猿飛彦……開祖の三女久子さんの夫たる福島虎之助氏のこと。

※魔子彦……京都の南部孫三郎氏のこと。

※藤足彦……四方藤太郎氏のこと。

※中裂彦……中村竹造氏のこと。

※土彦……元金光教会の教師だった土田雄弘氏のこと。

※胸長彦……野崎宗長氏のこと。

※牛人……村上房之助氏のこと。

※瑞霊……主神の顕現神。

※大八洲彦命……瑞の御魂の和魂。のち月照彦神と現れ、後世印度に釈迦として降

「**計**」を定め、**金勝要神**を**菓籠**中のものとせむとした。その主謀者は**奸智**に長けたる**春子姫**であった。

**春子姫**は**藤足彦**、**牛人**とともに、**小島別**を**甘言**をもって説きつけ、**小島別**の手によつてその目的を達せむと企らんだのである。**小島別**は**元来正直の性質**であるから、**春子姫**の**詐言**を信じて**車輪の運動**を開始したが、彼は**嚴の靈の靈眼**に見破られて**目的を妨げられ**、ついに**自棄**味になつて**大々の活動**をはじめ、**木常姫**、**中裂彦**の**悪神**を加え、**鞍馬山**に立てこもつて、**該山の魔王**と**謀し合せ**、**数万の邪靈**を引つれ、**強圧的に****竜宮城**を**占領せむと企てた**。しかし**注意ぶかき****大八洲彦**の**炯眼**に**再び看破られ**、**小島別の覚醒**の**返り忠**とともに**第二の計画**も**全然破れてしまひ**、**春子姫**は**遂に悶死**を遂げ、**根の国底の国**に**落ち行くの止むを得ざる破目**となつた。

**春子姫**の親なる**武蔵彦**は、**こんどは筑波仙人**の**体を籍**り、**またもや****竜宮城**の**占領**を企てた。しかるに**武蔵彦**の**目的**とするところは**竜宮城**の**占領**ばかりではなく、**地の高天原**の**聖地**をも**占領**し、その**上国常立尊**を**退去**させ、**盤古大神**をもつて、**これに代らしめむとするのが根本的の目的**であつた。

さて**仙人**には**神仙**、**天仙**、**地仙**、**凡仙**の**四階級**がある。そしてその**四種の仙人**にも、**正邪の区別**がある。**筑波仙人**は**邪神界**に属し、**第三階級**に属する**地仙**である。

また**もや****武蔵彦**は**黒姫**、**菊姫**、**八足姫**を**先頭**に立て、**竹熊**に**策**を授けて**再挙**を企てた。**竹**

誕。

※小島別……開祖の命で聖師様を綾部にお迎へした四方平蔵氏のこと。

※嚴の靈の靈眼……開祖が危険を察知して不思議な禁厭が行われた。

※該山の魔王……京都鞍馬山に立てこもる邪悪な系統の魔神。

※炯眼……眼力の鋭いこと。洞察力のすぐれていること。

※覚醒的返り忠……間違つていたことを悟り正しい忠義心に返ること。

※春子姫は遂に悶死を遂げ……京都鞍馬山の出修により四方春造(春子姫)の野心・企みが神明に照らされて遂に悶え死ぬ結果となる。(明治三十三年十一月十三日死亡)

※筑波仙人……邪神界に属し、仙人の第三階級に属する地仙。

※黒姫……黒田清のこと。

熊はまず第一に金勝要神をわが手に籠絡せむとし、土彦、牛人、中裂彦、鬼熊らの部将株と、大江山に集まって熟議を凝らした。竹熊は表面きわめて温良な風姿を装っているが、その内心は実に極悪無道の性質をもっており、いろいろと手を換え品を換え、巖の御魂に取りいつて、表面帰順の意を表し木常姫を手にいれ、またもや小島別を誑惑し、牛人をしてついに大八洲彦命を計略をもって亡ぼさしめむとした。牛人の悪霊は謀計をもって大八洲彦命を堂山の峽に導き、竹春彦、藤足彦その他数名の邪神に命じて、雙方より之を攻め討たしめむとした。そこへ守高彦という武勇絶倫の神現われて、大八洲彦命の危難を救わむとした。されど守高彦はある附属の女神のために後髪をひかれて、進むことができなかった。

竹熊の部下は、今や大八洲彦命に接近しきたり、十握の剣を抜き持ちて前後左右より斬りつけた。大八洲彦命は雷のごとき言霊を活用し、巖の御魂の御加勢により、脆くも敵は退散した。

この時代の高天原においては稚姫君命は大いに御心配あそばし、不思議な神術を実行され、その神術と言霊と相俟つて敵を退散せしめ無事なるを得たのである。その神法は千引の岩を大神の神殿に安置し、岩の上に白き真綿と、赤き真綿とを重ねて岩にかぶせ、赤色の長き紐をもつて十二廻り廻し、これを固く縛らせられたのである。これは神界の禁厭であつて、一身上の一大事に関する時に行うものである。

※菊姫……中村竹造氏の妻菊子さんのこと。

※千引の岩……綱を千人で引くほどの重さの岩。とてつもなく大きな岩。

※神界のまじない……現界の禁厭（まじない）

大八洲彦命の言霊の雄健びと神術の徳によつて一旦退却した竹熊の一派は、ただちに地の高天原に馳せ登り、稚姫君命の御前にまかり出でて表面に改心を装い、命をして深く安堵せしめおき、油断の際に乗じて、執念深くも金勝要神を手にいれむと百万苦心をめぐらし、夜を日について大々の活動が続けるを見たまひし大神は、竹熊一派を憐れみ、善心に立ち帰らしめ、善道に導き救わむとして、種々と因果の理法を説き教えられた。

されど元来悪神の系統なれば、表面には改心せしごとく装いおれども、内心はますます荒んで来るばかりである。そこへこの度は、大江山から現われた邪神の頭領株、鬼熊なるもの現われきたり、竹熊と密謀を凝らし、あくまでも最初の目的を達せむと試みたが、この鬼熊と木常姫との間に、非常な意見の衝突をきたしたために、竹熊との関係上自滅的に破れてしまった。竹熊は木常姫と同腹で、今度の計画を立てていたのである。そこで鬼熊と木常姫は、意見の大衝突より大争闘をはじめた。又ある事情のために竹熊は鬼熊と争い、鬼熊に対して非常の打撃を加えた。この衝突たるや総て彼ら悪神の権力争いのためには起つたのである。

(大正一〇・一〇・二二 旧九・二二 加藤明子録)

い)も同じようですが、使い方の善し悪し  
 かもしれませぬね。

瑞 月

世の人に好すかれ慕はれ亦人に

誤解せらるゝ身こそ苦しき

憂き事の如何に汝が身を包む共

伊吹拂へよ希望の風に

水晶の玉よ教の柱よと

世に攻めらるゝ人ぞいとしき